



## 日本魂は植林の心

### 心あったかニュース

日本人が植林をしたのは、なんと縄文時代からだったそうです。

採集のため、栗林を作っていたそうです。植林をするって、ただ採る、ストレートに言うのと、取るだけじゃなく、次のことを考えて、自分から与える優しい行動だと私は思えます。植林しないと、はげ山になって、定住することとはできません。定住して、多くの人に恩恵が行き届くことをした人達は、優しいだけじゃなく、未来も考えていたのでしょう。だから、戦争がなかったんですよ。だから、私達が習った、縄文人って、原始人に近い感じでした。だが、戦わずに、暮らせていたのは、ある意味、私達より進んでいる人達だと思えます。きつと、栗も美味しく調理していたように思えてきます。中国の2万ヘクタールの砂漠の緑化に成功し、その功績から毛沢東を除くと生前に中国国内で銅像が建てられた唯一の人物、遠山正瑛さんをウイキペディアにのっけてみましたので、紹介します。京都帝国大学農学部に合格。

卒業後は同大で助手として働いた。1934年、28歳の時に外務省から中国大陸の土地と農業の調査研究留学の話を受ける。留学先ではゴビ砂漠が農地を侵食し、作物が取れずに困窮したことで2000万人以上が餓死していた。日中戦争で帰国後、京都大学農学博士。論文の題は「砂丘地の特殊環境と適応作物の研究」。1971年に定年退職。翌1972年に日中国交正常化で日本国内に家族を残し、私財を投げ打って一人で訪中した。中国政府も砂漠化を食い止められず、1930年代に村があった場所はゴーストタウンになっていった。2000万人以上の難民を生んでいた「死の土地」という四国ほどの広さがある砂漠で、日中40度を超える中で毎日数十キロ歩き回って手作業で砂を掘って水源を発見した。数ヶ月後に水源を発見後に日本で寄付金を募って、鳥取砂丘の例

から砂漠でも育つ葛のタネを八年かけて約7000万粒を収集した。そして、80歳で協力スタツフと共に訪中して地元住民の妨害を受けながら3000本を植えたが、土下座して頼んでも一晩で現地の放牧ヤギと飼い主に食べられた。そのため、ポプラの木を代替とする。しかし、水分が足らずに枯れたので、日本のオムツから保水性の高いポリマーを日本から持ってきて使うと成功する。しかし、100万本植えたところで、黄河が氾濫して流される。そして、スパイ扱いしていた住民たちも感動し、地元協力を得たことで急ピッチで100万本植林された。そして洪水から1年後に、死の土地が2万ヘクタールの緑の森になり、農地化にも成功した。野菜がとれるようになり、去っていった住民たちも戻ってきた。こうして、かつて「死の土地」だった場所を復活させた。その様子はNHKのドキュメンタリー番組「プロジェクトX〜挑戦者たち〜」で取り上げられた。

#### 編集後記

歴史を知ることって、とても大切ですね。私達の心に流れてくる温かさが変わってきます。遺伝子でしょうか。